兼好法師と経典（その2）

西應寺　住職　寺本浩伸

（三）「経をとる」ということについて

徒然草の中の「経をとる」ということは具体的にどのようなことを指しているでしょうか？これは「経典を読誦（どくじゅ）する」ということであろうと考えられます。

「読誦」とは経典を声に出して読むこと。経典読誦（お勤めをすること）とは声を出して「お聖教」を唱えることで仏さまのお心に触れることであり、私たち自身が絶対的な真理に出遇わせていただく重要な場です。仏教の経典はもちろん漢文で書かれてあるので、意味が即座にわかるわけではありませんが、声に出して読んでいく中で、仏さまのお心に直接に触れることができます。

蓮如上人はお聖教を読誦する意義を次のように述べられています。

一、十月廿八日逮夜にのたまわく、正信偈和讃をよみて、仏にも聖人にも、まいらせんとおもうか、あさましや。他宗にはつとめをして回向する也。御には他力信心をよくしれと、おぼしめして聖人の和讃にそのこころをあそばされたり。ことに七高僧の御ねんごろなる御釈のこころを和讃にききわくるようにあそばされて、その御恩をよくよく存知して、あらたふとやと念仏するは、仏恩の御事を聖人の御前にてよろこびますこころなり。とくれくれ仰せ候き。

（十月二十八日の逮夜のときに、蓮如上人は、「正信偈和讃をおつとめして、阿弥陀仏や親鸞聖人にその功徳を差しあげようと思っているのであれば嘆かわしいことである。他宗では、勤行などの功徳を回向するのである。しかし浄土真宗では、他力の信心を十分に心得るようにとお思いになって、親鸞聖人のご和讃にそのこころをあらわされている。特に、懇切にお書きになった七高僧のお書物のこころを、だれもが聞いて理解できるようにと、ご和讃になさったのであり、そのご恩を十分に承知して、ああ尊いことだと念仏するのは、仏恩の深いことを聖人の御前で喜ばせていただく心なのである」と、繰り返し繰り返し仰せになりました。」）

浄土真宗の日常勤行である正信偈や和讃は、われわれの救われるおいわれをお示し下さった宗祖聖人のみ教えに遇わせていただくという心で、「みずから拝誦しながら、みずから聞く」というこころで勤めることが大切です。読誦という形で、阿弥陀さまや聖人の御前で、そのみ教えにふれさせていただくことはありがたいことです。

一方で「声に出さずとも、意味のわかる意訳聖典等を黙読した方がいいのではないか」という考えを持っていらっしゃる方もいます。そもそも、明治時代までの読書スタイルは、文章を声に出して読んでいく音読が一般的で、読書は音読することを意味していました。実際に家族やグループといった集団で新聞や本を読んでいたという記録が残っています。印刷が普及するとともに、ひとりで静かに黙読するというスタイルに変わっていきますが、少なくとも明治三十年代頃までは、ひとりで音読したり、書物を読み聞かせたりといった習慣も残っていました。

なぜ声に出してお勤めするかというと自分の声を自分が聞いて喜ぶと同時に、人にも聞かせるという意味があるからです。

勤行というものは、聞く人をして何となく尊い感じにひきいれるもので、それを聞いて因縁のある人は法を崇敬する心を起こし、知らず知らず法にひきこまれていきます。蓮如上人は勤行の節や調子を正確にすることを、とてもきびしくさとされています。

正確で、おごそかに勤行をする態度が、周囲の人々を法にみちびく因縁をつくっていくことでしょう。

読経したり、それを拝聴することによって、そののち行われる法話や説教を聴聞する聞く姿勢がただされていくのではないでしょうか。

お勤めのあとに門信徒の方から、「このご文はどういうことをおっしゃっているのですか？」というご質問があることで、ご法義の話に発展することが増えてきました。

兼好法師はこの段で「**形式から入ることによって物事の本質に迫ることができる。**」ということを示されています。

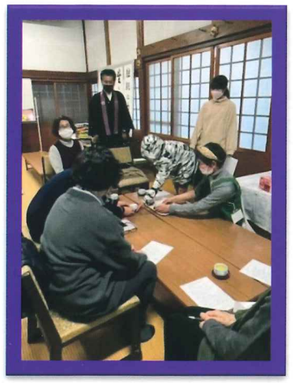
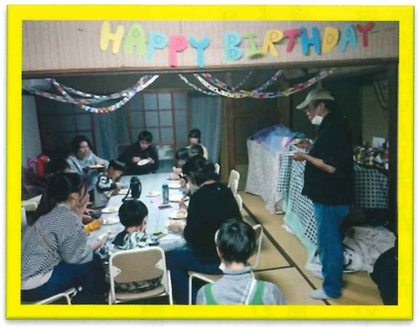
お聖教を読誦するという形をとることによって、その後のご法義の話も深まっていくのではないでしょうか。

仏教婦人会より

仏教婦人会会計　奥田由紀恵

令和4年度は島上南組仏教婦人会の活動として物故者追悼法要に取り組んでまいりました。役員会等を重ねて準備も整った頃、コロナ感染者数が上昇し、再延期という苦渋の決断となりました。次回は活動につなげたい、と強い思いを胸にしております。

そんな折り、東天川西法寺の子ども支援活動の取り組みを見学する運びとなりました。「子ども達を救いたい」という純粋な気持ちが始まりで、同志者が輪になって子ども食堂へと広がっていきました。お話を通して実行力や勢いなど、ボランティアさんの若い力に感心するばかりでした。そこから私達の活動につながるパワーをもらえたように思います。

今年度のダーナ活動は献金に加えて、日用品の寄贈も活動中です。これからもより一層のご協力を賜りますように念じております。

合掌